

# 映像で建築を味わう

神戸芸術工科大学 学長

松村 秀一

Shuichi Matsumura

## 刑事コロンボ

若いと思っていだらいつの間にか高齢者になっていた。

前回話題にした川上哲治さんのように、私の思い出す固有名詞が普通の日本人に通じにくくなってきていて困ってしまう。一九七〇年代に日本のテレビで放映され、本国アメリカと同様に大人気番組となった「刑事コロンボ」もそのうちだ。

田村正和主演で一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて人気だった「古畑任三郎」はまだ多くの日本人にわかるようなので、「『古畑任三郎』がお手本にしたアメリカの刑事ドラマ」と説明して会話を成り立たせるのがやっとだ。

## 映画の場合

実は、この例のように訪れてみた建築や町が映画やドラマの舞台になつていて、自宅にいながらにして、或いは近くの映画館に出かける程度で、たつぷりと味わえる例は決して少なくない。忙しい人にとっては、建築を味わう良い方法だと思う。

実際私が経験した映像の例で、ぱっと思いつくものを三つだけ挙げておこう。いずれも映画作品である。

一つ目は、一九五三年のイタリア・アメリカ合作映画「終着駅」。原題は「終着駅」の「テルミニ駅」。モントウリの設計によって完成してまだ二三年の、流れるような構造表現のフロント部分の内部が、何度も何度も映し出される。一〇分どころではなく、映画の全編にわたりこの駅が出てくるような印象だから、本当に自分がそこに行つた気持ちになれる。

二例目は、一九八〇年代にパリ郊外の新しいニュータウンの様子を知

十月初旬、その「刑事コロンボ」を突然観たくなって探したところ、ある動画配信サービスで六九話すべてが観られると知り、早速登録した。一九六八年にアメリカでパイロット版として放映されたという第一話は、邦訳「殺人処方箋」。殺人犯役は、一九六〇年代半ばに日本でも放映されていたアメリカの刑事ドラマ「バーク」にまかせろ」の主役を

クールに演じたジーン・バリーだ。ここまでのところ、若い読者にとってはちんぷんかんぷんだろうが、話をここで止めるわけにはいかないの

で、申しわけないが続けさせてもらいたい。

この第一話を観ていて、いよいよコロンボが殺人犯を追い詰める最後の場面で、思わず声を上げてしまった。かつて私も訪れたことのある、建築界ではまずまず知られたハリウッドの有名住宅そのものが舞台で、一〇分弱の場面が、セットではなく、その住宅で撮影されていたのである。わざわざ西海岸まで見学に行かなくても、この場面を見れば、住宅の内観や外観はもちろん、庭やロケーションまで、すっかりわかるほどに長い場面だったので、思わず声が出たわけだ。

ちなみにこの住宅は「スタール邸」と言い、一九六〇年代前後のカリフォルニア・モダニズムを代表する建築家ピエール・コーニッグによって設計された住宅である。一九九九年にはロサンゼルス歴史文化遺産に指定されたと聞いている。



テレビドラマの撮影風景(神戸芸術工科大学、2025年夏)

長年東京で暮らしてきたので、私の知り合いは大部分が首都圏住まいで、私の勤務先の神戸まで訪ねてくるのはそう容易なことではない。どうしたら、神戸まで来られない人に私の大学の雰囲気伝えられるだろうかなどと考えていたところ、に、良い話が飛び込んできた。私のいる神戸芸術工科大学で、この秋から始まったテレビドラマの撮影が行われ、何名かの学生たちも登場しつつ、中庭、アトリエ教室、購買部等が、人の動きを伴って映像化されたのである。

「すべての恋が終わるとしても」というのがドラマのタイトル。十月十二日の初回放送で、その映像を確認することができた。やはり、人の動きや声までが入った映像は、施設写真ではなかなか伝えられない建築空間の質のようなものをずばり伝えてくれる。

建築の一つの楽しみ方である。

りたいとフランスの友人に相談したところ薦められた映画「友だちの恋人」。まさしく当時まだ開発して間もなかったニュータウン「セルジープントワーズ」を舞台にした映画で、そこでの暮らしぶりもたつぷり描かれている。フランスのニュータウンと日本のそれとの違いに興味がある人などは、大いに参考になると思う。

三番目は、一九六六年に公開された「アルジェの戦い」。一九五〇年

代のアルジェリア戦争を描いた映画だが、実際のアルジェの旧市街で、しかも実際の戦争で戦った人々や一般市民が多数登場して撮影された異色の作品で、二十世紀の戦争映画の最高傑作と称せられることもある。ここでは、町中の複雑な街路の様子からアジトを含む住居内の空間配置のあり様までが、緊迫感を伴って映し出される。凄い映像だ。

## 身近なところでも